

俳句雜誌



空

令和元年5月10日発行

第17卷2号

通巻第84号



2019・4・5

SORA 84号

福岡 秋津 令

人よりも寒鴉の増ゆる故郷かな

黒潮に乗りて来れり七福神

集落は二軒なりけり露の臺

春や春衣装箆笥を開け放ち

如月や医者はさらりと余命言ふ

福岡 栗原 京子

戦ひに行く凧を味方とし

訪ひたきは諸国絶景初暦

正面も裏も行列十日恵比須

青空に腕の波や玉せせり

握手にて終るサッカー冬青空

須恵 苑 実 耶

うぐひすの鳴き継ぐ声に目覚めけり

食べ終へて母眠りをり春炬燵

うららけし老いたる犬は尾で応へ

車座に赤子を放つ花の下

をはりにはあけつびろげのちゆうりつぷ

長崎 仲里 奈央

足並の揃はぬ夫婦煤払ひ

病院の窓いつぱいの初御空

寒紅を引く寝たきりと見せぬやう

通園リュック背負へぬほどに着ぶくれて

人形と布団分け合ふ吾が子かな

大阪 井上 和子

鍬の柄に打ち込む楔農始

さつと消す黒板の字や夕時雨

コンビニで喪のネクタイを買ふ霜夜

枯れ尽くす瓢の一つ吹かれをり

暖炉燃ゆ壁に山下清の絵

福岡 あさなが捷

呼び鈴にまづ犬が出て春隣

犬の死を忘れし母の日向ぼこ

少年兵の完璧な遺書緑雨かな

囀や手ぬぐひ干され地蔵堂

桜鯛鱈パリと立つ祝膳

兵庫 林 徹也

百歳にひとつ届かず寒椿

野火のごと手燭拡がる聖夜ミサ

消灯のナースにメリークリスマス

亡き母の部屋にも掛くる初暦

読初はガラシヤ夫人の最終章

熊本 松田 明子

どこからも望める城や冬あたたか

十重二十重神楽の大蛇畳まるる

天地に初田鶴声を交はしあふ

梅ふふむ父に未完の戦あり

旅の荷に加へてゐたる風邪薬

北九州 兒玉 充代

東京 今井 康子

朝拝の皇后さまの笑みほのか

少し笑み都知事出初のオープンカー

初春の景のさだまる遠嶺雲

日食へ大放水や出初式

初春の木目きはだつ床柱

梯子乗ひらりと逆さ大の字に

しきたりもほどほどにして三が日

着ぶくれにへりの編隊迫りくる

女正月食ぶるに惜しき京の菓子

放水は五輪の色に出初式

大阪 田岡 千章

春日 三井所美智子

蓮枯るるそつぽを向きて順路の矢

優賞の新米五キロ提げて来し

牡蠣啜り疾うのむかしの艶話

片方の髭焦げてゐる竈猫

粕汁をたらふく健康寿命かな

母ありし日の昆布巻寒鮎煮

セーターの心音きつく抱きしむる

代はりあふオペラグラスや初芝居

限り無き世事に翻弄されて除夜

餅搗きのかつてはありしダムの底

兵庫 青木 朋子

参道の幾筋もある山眠る

暮らしたかもしれぬ町過ぐ初電車

譲られてゐるは吾らし初電車

譲られし席にちんまり初電車

初晴や鏑矢を引く手のふるへ

東京 遠山のり子

イヤリング揺るるを選ぶ初鏡

縁側にあまる日溜り賀状読む

敷石に歩幅を合はす恵方道

箒目の残る参道初詣

千年杉きりりと結ぶ注連飾り

兵庫 岩井 京子

軽々と身の動き初む四日かな

初波の揺れもめでたく鴨来る

鴨にやる餌掠め取る鷗かな

手の餌を見つけ構ふる初かもめ

遠まきの初鳩いつしか膝近く

北九州 横田 敬子

赤い実は鳥に残して冬木剪る

留守の間に隣家の前も落葉掃く

落武者のごとくに藁の積まれけり

もう家に戻れぬ母や冬すみれ

母守りし畑を継ぎぬ鋤始

・ 第八回 「空賞」 受賞作品 ・

材木屋

曾根富久恵



父の十七回忌と母の三回忌を迎えた年に「空賞」を頂きましたことは大変感慨深く、祖父が興し祖母・父そして母が受け継いできた家業の材木屋や、祖父母・父母への思いを詠んだ句が評価され喜びも一入です。

私は木の香りに生まれ、作業場の棟梁や番頭さんたちの仕事振りをしながら育ちました。母のあとは、私が染色講師の傍ら事務管理をしてまいりました。今も四十数年勤務する番頭さんや退職後に店を継いだ妹のお蔭で商いを続けております。

これからも直方句会の仲間と共に、より一層の精進をして参ります。ありがとうございます。

曲尺は角をくづさず寒の入り

冴返る商ひを継ぐ姉妹

恋の猫材木倉庫ほしいまま

材木の隙に恋猫追ひ詰めし

製材の粉塵混じる霾ぐもり

鑿・鉋・鋸・金鋸や風光る

片隅に父の碁盤や雛の間

うつらうつらと店番の母燕くる

穴を出し蛇が材木置場へと

八十八夜仕入れし杉の匂ひたち

初夏や檜の板の白き肌

墨壺の乾く作業場蟬しぐれ

釣銭を空き巢が盗む薄暮の夜

屋久杉に巢掛けむと蜂探りをり

祖父の世の印半纏風入るる

商ひは尺貫法や秋の昼

材木の隙から隙へ蛇うねる

荷を卸す男勝りや天高し

山笠^{やま}を組む杉の角材納入す

鉋屑で遊ぶ下校児小鳥くる

蚊遣香祖父の手になる事務机

母屋より大鍋運ぶ年忘れ

夜に入りて羽蟻落ちくる帳簿閉づ

餅搗や棟梁来れば酒盛に

商ひは向かぬと思ふ生ビール

七十年商ひ続け去年今年

子に乗せて問屋の来る夏休み

お飾りを据えしるがねの製材機

冷房の効きすぎ当座入金帳

祖父の算盤父の算盤帳始め

空集抄 — 柴田佐知子抽出

保安帽ごろりと横に走り蕎麦

玉せせり体をねぢり玉奪ふ

いま打つた釘が抜けない十二月

煤払ひ終りは己が煤払ふ

虎落笛破船のあばらさらに痩せ

まだ縫へる掌に火種めく草珊瑚

音のして朴の落葉と思ひけり

里神楽荒ぶる神は千鳥足

お位牌を少しずらして鏡餅

岸 洋子

高倉 和子

角野 良生

石橋 幾代

深川 淑枝

中田 みなみ

戸栗 末廣

山本 則男

曾根 富久恵



桃色の豚揺れて来る初荷かな

ふところに何でも仕舞ふ海鼠売

楮蒸す匂ひ広がる峡の里

活き締めの鮭なほ卵生み続け

繰り返すスタートダッシュ日脚伸ぶ

泡沫のやうな雪見る床の中

春愁や金平糖に角六つ

冬夕焼でんぐり返つて母を待つ

年用意予防接種に始まり

子らは子の昔を語り大晦日

露を採る裾を茨に引つ張られ

もぐり込む猫の形に毛布かな

田中とし江

坂口晴子

石川子熊

永淵恵子

森田明成

宮井知英

秋津 令

吉田 菡

原 友子

青木朋子

苑 実耶

あさなが捷

返り花あとかたもなく捨つる恋

ひとりとして今までどほり七日粥

喫茶店の忘れ物箱年の暮

はしやぐ兒も泣き出す兒も居てお正月

鶴眠る頃あかあかと鶴の宿

黄昏の顔まだ見えて枯木立

母の居しベッドの窪み冬椿

大仏に身を預けつつ御身拭

初糶の声が火となる午前五時

触れられし指手袋にしまひけり

おほよそは取るに足らぬと寒鴉

山肌に新しき疵山眠る

吉田悦子

河原敬子

山田正子

小島翠波

松田明子

見玉充代

横田敬子

井上和子

星加鷹彦

大西乃子

古賀真理

村上二三



雪山に立ちて地球の青さかな

年用意まづ父ははの遺影拭く

舵取りのなき宝船風まかせ

湯気上げて走る悍馬や十二月

スカートに髣くつきりと卒業す

筑波嶺や木の実の点字踏み登る

煤逃げの気分も少し入院す窪みち子

雪吊のはじめ半纏羽織りけり

病室に二度も昼寝や日脚伸ぶ

夕紅葉映して水は底無しに

来ぬ賀状思うてをれば訃報くる

一族の要は我か結び昆布

山内 碧

岩下きぬ代

えとう樹里

むつみ蓮

木村澤子

田中素直

窪みち子

後藤園子

畑 由子

本多トミ

岩井京子

今井康子

空作品評

柴田佐知子

いま打つた釘が抜けない十二月 角野 良生

確かにこのような経験はある。しかし句にしようと思つたことがなかった。それがどうしたというような内容なのだが、座五に据えられた季語へ「十二月」が絶妙の効果をおいている。たとえば「年の暮」か「師走かな」であれば、このせわしない時に…という浅い理屈が目についてくる。わずかな違いのように見えるが句の厚みと勁さは異なる。良生さんのうまさがる。

まだ縫へる掌に火種めく草珊瑚 中田みなみ

みなみさんはスーツから小間物までご自分で縫おれる。「空」同人の高夏千夏子さんの角川俳句賞受賞式に出席したとき、千夏子さんは素敵なドレス姿であった。みなみさんがお祝いに縫われたものだと聞いて驚いた事を思い出す。

〈草珊瑚〉は正月によく活けられる〈干画〉のこと。

掌に置いた草珊瑚。鮮やかな赤い実が命の火種のように思えてくる作品だ。九十歳を超えられたみなみさんの声が聞こえるような〈まだ縫へる〉がいい。瑞々しい作品を詠み続けられるみなみさんの若々しい詩情とあたたかいお人柄：私の尊敬する人生の先達である。

お位牌を少しずらして鏡餅 曾根富久恵

年用意の寸景の描写。私も仏壇を拭きあげて小さな鏡餅を据える。その時この句と同じような動作をしていた。生活の一場面が的確に描かれている。いつも作句に必要なアンテナが鋭敏に張られているのである。

ふとこゝろに何でも仕舞ふ海鼠売 坂口 晴子

(千波悠改め)

島の栈橋付近で海鼠を売っているのを見かけ、俳句仲間がみんな取り囲んでいたことを思い出した。地べたに置かれたバケツの中に海鼠が動いていた。へふところにも何でも仕舞ふで光景が鮮やかに浮かび上がる。全部を説明せず焦点を絞り込むことで句が強くなるのだ。

〈以下略〉

空集

柴田佐知子選



神棚に小さな柱お正月

福岡 高倉和子

玉せせり体をねぢり玉奪ふ

風花や祠小さき漁師町

母の声思ひ出したる日向ぼこ

焚火より離れて耳の縮みけり

人混みの中の独りや寒波来る

街道の国旗古りゆく二月かな

保安帽ごろりと横に走り蕎麦

福岡 岸 洋子

七人の男取りつく松手入

観音の右も左も大根干す

ちちははの来さう日の射す古障子

猪鍋や真つ赤な炭の運ばるる

角切の波打つ腹を押さへ込む

寒明けの折れてつながる波がしら

張り替へし障子のどこかよそよそし

福岡 角野良生

落葉掃く箒の癖に逆らはず

次の世に夫を待たせて柚子湯かな

生牡蠣にどこか禁忌の味かたち

物置に黙つて冬の来てをりぬ

偏屈の相は隠さず懐手

いま打つた釘が抜けない十二月